

第 5 回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

議事録

あいさつ

事務局 国土交通省は、生態系ネットワークの形成を目指して、多様な主体との連携、協働のもと、現在全国で約 8 程度の協議会を設置し、生物の生息環境の保全、それから地域振興を進めている。

現在、斐伊川水系では、雲南圏域においてげんきくんが新たなパートナーと二度目の営巣活動を始めたとの情報が入っている。そうした中で、本日この斐伊川水系における大型水鳥類の最近の動向、協議会として本年度の活動、今後の体制等々について議論を進めたい。

出席者紹介

（「出席者名簿」と「配席表」をもって紹介としたのち、新たに委員となった雲南市長、奥出雲町長、飯南町長より挨拶をいただいた）

委員 昨年 の 3 月、雲南市にコウノトリが飛来し、営巣、雛の誕生、放鳥を経て、今年もコウノトリが営巣しようとしているところ。昨年 の 10 月にこの協議会に参加し、12 月に行われた雲南圏域ワーキングの事務局を請けている。これまで雲南市が進めてきた、環境を大切にする町づくりがコウノトリにも気に入ってもらえたことだと思う。引き続きコウノトリも人も共生できる町づくりをこれからも進めていきたい。

委員 斐伊川の源流の町として皆様方と共に地域環境を生かした、地域づくりそして地域活性化に取り組んでいきたい。

委員 飯南町は神戸川の源流の、自然豊かな町。町内で特別栽培の米づくりを推進している。これらの大型水鳥類が多数、本町へ一日も早く来てくれることを願う。

議事

（1）指標大型水鳥類に関する最近の動向について（報告）

（「資料 1：指標大型水鳥類に関する最近の動向について（報告）」の説明）

（質疑等発言なし）

（2）今年度の活動報告等

（「資料 2：今年度の活動報告等」の説明）

委員 今回説明があったような全国におけるイベントに、斐伊川生態系ネットワークの関係者が

積極的にご参画をいただいた成果か、近年、斐伊川の取り組みが全国レベルでかなり着目をされるようになってきているようだ。

委員 これだけ多くの大型水鳥が来ていることに感心する。同時に、これらを経済活動に活用できないか、地域活動と経済活動を一体化させる取り組みが必要なのではないかと考える。現在雲南に来ているコウノトリの定着個体数の増加、繁殖の成功に結び付けるためにも、よりよい環境を用意する必要がある。そうした環境を活かした農産物等の生産・販売を進め、地域活動と経済活動が一体となった取り組みのモデルケースになってほしいと願う。そういったモデルを、まずは一つ進めてみることはできないか。

委員 安心・安全な環境に優しい農業をはじめ、大型水鳥類が飛来して生息することのできる環境づくりが大切であり、コウノトリが住むことのできる環境は、私たち人間が住むための環境づくりでもあると考える。島根県であればこそできる地域づくりを島根県全体で認識して、地域づくりに取り組んでいく必要があると考える。その結果、観光振興にもおおいに役に立つ。こういった認識をみなさんで共有したい。それこそ今一番必要なのではないかなと思う。

委員 豊岡の中貝市長が3期目の時、コウノトリに関する言葉を「コウノトリが住める豊岡」という言葉を「コウノトリも住める豊岡」に変えた。コウノトリも住むことのできる「豊岡」というまちは人間も豊かにする場所であり、住み良いまちであることを内外に伝えたい思いの表れと考える。また、域内で災害、洪水が起きたり土砂崩れが起きたりすると、コウノトリのために財源を割くのはおかしいじゃないかという声が出がちだが、実際は、市民から、なんとかコウノトリの生息環境をもっと作ろうという声があがる。コウノトリは、自分たちが望ましい故郷をつくることの指針となっているのだと考える。そこにしっかり力を入れていった結果が今日の豊岡の姿。

(3) 生息環境づくり部会、地域づくり部会について（報告）

（「資料3：生息環境づくり部会、地域づくり部会について（報告）」の説明）

委員 先日訪問した豊岡で、域内、域外生息のコウノトリがあわせて200羽ほど豊岡に生息していることを知った。やはり、安心して生息できる採食地がないといけないと考える。今の報告では環境対策の取り組みの一つとして冬期湛水水田が紹介されていたが、雲南市では未利用水田が多く、荒廃している水田もある。こうした場所を復田し、ビオトープ水田として活用することも考えられるが、その取り組みを裏付ける財政的な支援が課題。ビオトープ型の農地の活かし方について、補助事業の対象とならないかと考える。

また、出雲河川事務所の方で斐伊川の水辺環境整備に関する計画が進んでいるので、いつ頃までにどの水鳥が飛来する、定着するような環境づくりを進めるのかといった整備年限を目標立てて、それに向けて何をやっていくというアクションプランも作成する必要があると考える。

委員 半分事務局という立場での発言となる。

前段の水田の活用、農林水産省の財政的な支援制度等については立場上即座に答えるのは難しいが、オブザーバーとして協議会に入っている農林水産省も含めて、こういった対応が可能か、方向性を定めて、協議会の場で共有したいと考える。

目標に向けたアクションプランについて、方向性については共有できていると思うが、具体的に何をいつまでにというところは試行錯誤の段階。具体的にどこで何を、役割分担はどうするかについて、この協議会のメンバーで、それぞれの立場で話をしながら考えていく必要があるかと思う。国土交通省・農林水産省・環境省という国だけではなくて、むしろ市町村や民間、他の関係団体も含めた、地域の方々がまさに主体的にどういうふうにか考えるかが非常に重要と考えている。

委員 豊岡でも、コウノトリと共生する地域づくりについては、最初の頃は大変な苦労があったと記憶している。関西地方で大型スーパーが協力してくれるようになってから波に乗り始めた。関東エコロジカル・ネットワークでも、同じような方向で、現在、努力を続けている。大都市圏のスーパーや百貨店では、新たなブランド米を、価格に拘泥せず店頭に置くことに前向きな風潮が生まれている。こういった需要地との関係をどう密にしていくのかも重要。

委員 豊岡での、コウノトリ育む農法で生産したお米の売り先に苦労したということについては、合同部会の特別講演でも西村先生から紹介いただいた。

その合同部会で、別の委員からの報告で、京都では有機の農産物について大きな需要が出てきているという紹介をいただいた。都市の消費者は安全・安心な食べ物、オーガニックな食品に強い関心が向いていることの一つの表れでないかと思う。この協議会をきっかけとして、環境を整備するとともに、その環境を活かした地域振興に上手く繋げていく、そうするとそれが良い循環で地域が回っていく。今がそうした好循環に向かう、チャンスではないかと考える。

コウノトリも、現在雲南市で5羽が見られているが、出雲市や奥出雲町など、今後色々なところにコウノトリが増え、この圏域が第二のコウノトリの郷になっていくという可能性も強いと考えている。知恵を出し合って、上手く環境を良くし、地域づくりに繋げていく大変良いチャンスだと思う。

委員 生息環境づくりの立場から、これまでは主に国交省の管理区間で色々提案してきた。今後、地域全体としてどうやっていけば、鳥にとっても地域にとっても良くなるか、という観点で、一つずつでも具体的に実行できていけばと考える。

委員 豊岡の件に補足すると、お米の販売先確保に際しては、最初は地元の学校給食に使う、つまり、自治体自らが使うというところから始まった。

(4) 雲南圏域ワーキング（報告）

（「資料4：雲南圏域ワーキング（報告）」の説明）

委員 本日、私も午前中に雲南市の大東町春殖地区へ伺った。コウノトリに感動したことはもち

ろん、公民館に貼ってあった、地元の西小学校の6年生が作成した「人もコウノトリも幸せな町」というタイトルのポスターにも感動した。静かに見守ろう、田んぼの水を残そう、環境を皆で大切にしようといったことが書かれていた。

（５）部会・WGの再編について

（「資料５：部会・WGの再編について」の説明）

委員 再編について。対象となる圏域の規模が大きいため、実践の一步に中々踏み出せない側面があり、当初は雲南圏域のほか、中海と宍道湖の２つの地域に分けて考えてはどうかという案があった。しかしながら５市一体という一つの広域連携体制がすでに形作られている中、まずは雲南圏域でモデルの事業を推進していきながら、そしてなお中海・宍道湖圏域が、より具体性を持つような方向に踏み出していくことを期待して、最終的に今説明いただいた提案に至った。

委員 中海・宍道湖は５市長会という組織を作っている。仮にこれを２つに分けたとしても、事務局を引き受けるのはどこかという話となる。今の事務局からの説明にあった通りで良いのではないかと考える。

枠組みについて提案があり、雲南圏域ではワーキングというかたちで先行的に進んでいる。雲南圏域部会では、今後、是非とも地域づくり、生息環境づくりの面で、モデル的にプロジェクトチームを作り、実践に向けて検討を進めて欲しい。取り組みを支える財政支援についても、地域や目的をしぼった、具体性を持たせた形とすれば話を進めやすいと考える。

委員 この枠組みについては異存ない。８市町の中で、唯一両方の圏域に所属するのが出雲市であり、中心軸となりうることを意識している。

出雲市より２つ報告したい。

出雲市は、長年トキの飼育を行っているが、今年の秋に一般公開を予定している。

国が計画しているトキの野生復帰ロードマップでは、2020年に220羽が自然環境の中で上手く群れをつくって、次の世代をとという状況になるのが当面の目標。それが達成されれば、いずれ各地での放鳥も可能となり、その時には出雲の空をトキが舞う日が来ると思っている。我々の取り組みの目標は、この出雲の地にトキが舞うことである。

宍道湖西岸、まさに先ほどの野鳥の飛来する地域を中心に、約400ha、国営土地改良事業を平成30年度から本格的に取り組むことになっている。その計画の中では、当然のこととして、環境との調和への配慮を位置付ける予定。

委員 出雲市長には、扇の要として、両圏域を束ねる役割を果たしていただきたい。

環境と観光の視点から話題提供をしたい。観光庁と環境省が進めている「ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構」というものがある。自然環境とお酒、あるいは食文化が一体となった楽しみを、世界中に普遍化していくというのが、ガストロノミーツーリズムというものの根幹。こういうことができる場所として、まさにこの山陰の地域は心を洗い替えるのに相応しいと考える。温泉にも浸かり、そして美味しい酒と美味しい食事があり、そこにコウノトリが飛び、し

かもやがてはトキが飛ぶと。こういうことになれば、本当に大きな地域の経済活性化となる。課題もあり、解決していかなければならない。ぜひそういった意味で、中海・宍道湖圏域での圏域部会、意志決定は難しいところも多くあると思うが、多くの主体を動かすエンジンとなっていたきたい。

その他 今後の進め方（案）について

事務局 先の協議会や部会の今後の進め方については、各機関で問題がないという了解を得られ次第、規約の改正に移りたい。

（「今後の進め方（案）について」の説明）

委員 今後の進め方について、また、展開を円滑にする上で利用可能な助成制度について報告をいただいた。今回の報告にあったもののほか、地域創生に関わる様々な補助、民間も含めた助成制度が存在することも補足する。

こういった補助制度を活用するためには、やはり、戦略目標や、それぞれの主体の役割が明確にされなければうまくいかない。ぜひ、事務局でそうした検討を行い、圏域の中での議論を進めていただければと思う。

委員 部会・WGの再編に関して、部会の一翼を担う、まとめ役となることとなった。今度とも、皆様のご指導・ご協力をお願いしたい。

閉会

事務局 部会の再編については、各行政機関の中でご議論頂き、事務局の方に回答を頂きたい。それらを踏まえ、規約の改正に移りたいと考える。

以 上